

エンカウンター (ENCOUNTER)

第220号

2020年8月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://agape.wig.jp/encounter/>

佐生健光『キリスト教と称名』より (5)

山添順二先生のエピソード

先生のご次男である山添順二先生が、学生時代、休暇のときにアルバイトをしておられた。小西先生が用件があつて、アルバイト先に近い駅前で昼休みに落ち合うことになった。用件も終わり、そこで別れることになったが、順二先生はまだ時間は十分にあつたのに、かけ足で職場に帰っていかれた。その後ろ姿を見られ、先生は「非常にうれしかった」と感想をもらされた。

社会運動か、隣人を愛することか

キリスト教は、能力のある人が偉大な業績を残すためにあるものではない。平凡な人間が真剣に平凡な道を歩み、主のみもとに召されるための教えであることは、聖書を読めば読むほどよくわかることである。

平凡な者が、目の前に置かれた平凡なことを真剣になそうとするとき、人はその根底に「謙遜」が必要なことが分かるのである。そのような人間になったとき、人は本当の「愛」が実行できるのである。

「愛」を根底とした社会運動には、どうしても、この世的な力が必要になる。それは、政治や経済の問題を無視して進めることはできないからである。貧困や病いをなくし、理想社会を実現することに力を尽くす方々を尊敬することに於いて、私は人語に落ちるつもりはない。しかし、聖書は、このような方法を示唆しているわけではない。我々がこのような運動に身を投じようとするとき、このことを十分認識しておく必要がある。

聖書の主張するところは、我々はあくまでも、主の来たりたまう時を待ちつつ、汝の隣を愛することである。

小西先生と仏教（1）

母と父のエピソード

私の家の宗教は仏教日蓮宗である。私が幼いころ、母から「よいことをした人は死んでから天国に、悪いことをした人は地獄に行く」とよく言われたものである。また、母は自分が子供のころ、家に近い寺院の障壁に書かれていた地獄絵を見て、たいへん恐ろしい思いをしたことを、しばしば話してくれた。

そのことを小西先生にお話ししたところ、「お母さんはよいことをお話なすったな」とおっしゃられたことがあった。

私の父が臨終ま近の時、付添いの人から聞いたことであるが、父が小さな声で何か言っているのを耳を近寄せて聞いたところ、父は「南無妙法蓮華經」を唱えていたのであったということである。このことを葬儀が終わったあとでお経を上げてくれた坊さんに話したところ、「ああそうですか」という返事が戻ってきただけであった。満たされぬ思いでいた私は、このことを先生にお話したところ、次のようにおっしゃられたのである。

「お前のお父さんは浄土に行かれた。間違いなし！！」と、どん！と卓をたたかれた。

この先生のお言葉に接し、私は感激と安心で、晴れ晴れとした心に満たされたことは言うまでもない。

私の父は、若いころから苦勞の多い生活を切り開いてきた。彼のモットーとするところは、「艱難汝を玉にす」であり、そのための努力を惜しまず生きてきた人物と言える。それだけに、自信家でもあり、宗教については、世の中をよくするためにあってもよい、という程度の認識にとどまっていた。しかし、最晩年にこのような事実があったことは、私としては、まことに嬉しく、有難い思いを禁じえなかったのである。

小西先生と仏教 (2)

小西先生は仏教浄土門については、並々ならぬ知識をお持ちであった。先生は導源という雅号をお持ちであったが、導は中国の浄土門の導師・善導から、源は法然の別名・源空からとられたと聞く。キリスト教と仏教については、学生時代からの思索の結果、独自の見解をお持ちであった。先生は、源信、法然、親鸞を尊敬しておられたが、とりわけ源信とは郷里を同じくすることもあり、彼の人柄や信仰に共鳴されるどころ多く、特別な親しみをお持ちであった。先生のキリスト教が恵心流キリスト教と称えられる所以である。このことについては、何度も言及したとおり、称名に集約されるのであるが、先生が特に源信・恵心僧都にこだわられたのは何故か。仏教浄土門については聞きかじった程度にすぎない私の感想であるから、見当はずれかもしれないが、それをお許し願って述べることにしよう。

浄土門の3人の祖師方は、何れも念仏を中心にして救いを説いてこられた。これは、当然のことであるが、祖師方の念仏の考え方には微妙な違いがあるように、私には思える。

小西先生と仏教（3） 法然と親鸞

法然は念仏に関しては、非常にご熱心であり、日に6万回の称名を日課とされたほどであったという。晩年には、念仏しつつ臨終を迎えられたとのこと。また、「人は、できるだけ念仏しやすいところに身を置くべきであり、例えば、結婚した方が念仏しやすいければ結婚したらよいが、しない方が念仏しやすいなら、結婚しない方がよい」と言われたと聞く。しかし、その念仏は「一文不知の愚鈍の身になした者」の念仏である。

親鸞については、歎異抄の中のよく知られている一節を取り上げてみたい。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつころのをこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。（歎異抄より）

…ここでは、浄土行きが決まる「時」について、特に、親鸞がそれを明確にした点を強調したい。このことによって、信者の浄土に生まれる確信を不動のものにした。また、突然の事故や重病などで口で念仏を唱えることができない人にも、救いは確実であることが説かれている、と私は思いたい。

小西先生と仏教（４）

源 信

源信の念仏の特徴は、「妄念のうちより申し出したる念仏は濁りにしまぬ蓮の如くにて決定往生疑あるべからず」（横川法語より）という一言にある。

日に何度も称名するほどの熱心もなく、主の贖いを信ずるものの、救いの確信には程遠い者にとって、この言葉はなんと心強い響きで迫ってくることであろう。行いも信仰も落第生である者は、恵心流キリスト教でしか救われるすべはないのである。

3人の祖師方は、何方も熱心に称名された。そして、その称名はたとえ妄念から発するものであっても、称名しようと思いだれた瞬間に救いにあずかることができると、固く信じておられたと思う。しかし、祖師方はそれぞれ称名の異なった側面を示されたものと、私は思うのである。そのうち、小西先生は、源信・恵心僧都のとなえられた側面をとられたことは、誠に感謝である。

小西先生と仏教（5）

親鸞の二種廻向

親鸞は、「二種廻向」ということを強調されたと聞く。まず、現世で称名により浄土に往き、その後現世に還り、この世の人の救いの為に力を尽くす、という原理である。

このことについて、私は先に述べた先輩・山田氏が、次のように言っておられたのを思い出す。「今の私には、多くの人を救う力はない。しかし、命終え浄土に往って莫大な力を得た後、私は地上にもどり、人々の為に力をつくしたいと思う。だから、浄土に往ったあと、私はますます忙しくなるだろう」と。このことを聞いた時、それは仏教とキリスト教の違いの一つとして、さほど重要な事とは考えなかったが、山田氏の言葉は、私の脳裏に何時までも残り、何時までも反芻する原理となっていた。

小西先生と仏教（6）

私の伝道は、天国において開始される

……晩年の小西先生は、親鸞が述べた廻向を考慮しておられたように思われる。先生は、晩年、私たちの前で、「これから、私の伝道は、天国において開始される」と言われた。

我だにもまず天国に生まれなば 知るも知らぬも皆迎えてむ
という和歌もそのような消息を伝えたものと思われるのである。何時か、このことについても詳しくお聞きしたいと思いつつ、機会を逸してしまったのは、残念であった。

先生はれっきとしたキリスト者であられた、これを疑う人はいない。しかし、仏教とキリスト教の関係は、先生にとって極めて密接であり、先生に於いては、阿弥陀仏とキリストが同一の人格として、写っておられたとすら、思えたほどである。

先生が鎌倉の病院に入院しておられた頃、病床にお見舞いにあがったことがあった。ご気分もよろしかったのか、帰り道を送ってくださったが、その時、鎌倉大仏をバックに先生の写真を取らせていただいた。先生は、「私の後ろには、つねに主がおられる」と、その写真を気に入っていただけただけようである。

小西先生と仏教（7）

キリスト教と仏教の接点

先に述べたように、先生の、仏教浄土門に対する知識や尊敬は、単に、一人のキリスト教伝道師が持つ他宗教に対するそれを越えたものであった。そこで、小西先生は仏教浄土門とキリスト教を混ぜ合わせて、新しい一派を立てられたという見方をする人もいるかもしれない。が、それは違う。先生は、どこまでも忠実なキリストの僕であられた。キリスト教の真理をご自分の生活体験を通して理解され、我々にお伝えくださった。それを、最もふさわしい名として恵心流キリスト教とネーミングされたのである。

キリスト教と仏教の、類似や相違を現象的に論ずることはできるであろう。しかし、「救い」という観点で両者の関係をどのように理解すべきかは、常人には不可能なことである。だが、両者はどこかに接点があるに違いない。そうでなければ、浄土門の祖師方のお話にこれほど感激したり、私たちの信仰との、これほどの類似に驚いたりすることはないであろう。さりながら、その詳細は

「今われらは鏡をもて見るごとく見るところおぼろなり。今わが知るところ全からず」されど「かの時には顔を対せて相見ん。かの時にはわが知られたる如く全く知るべし」(コリント前書 13・12)

かのときこそ、我々はすべてを悟るのだ。